

翻訳

ヘレーネ・シュテッカー著

「産児調節と人間経済学」

掛川 典子

はじめに

本稿は、ヘレーネ・シュテッカー (Stöcker, Helene 1869-1943) が、1928年7月1日から5日までコペンハーゲンで開催された第2回性改革会議において行った、講演「産児調節と人間経済学」(Geburtenregelung und Menschenökonomie) の別刷からの翻訳である。「産児調節と人間経済学」と題したこの論文において、ヘレーネ・シュテッカーは優生主義者として、すでに1910年に『新世代』の第6巻第10号に掲載した「ハーグ国際マルサス主義者会議」(Stöcker 1910, 掛川 2007: 第二部参考資料11-15) のなかで述べていたのと同様に、ガルトン (Galton, Francis 1822-1911) の名を挙げながら、優生学が「未来の宗教」にならねばならないと主張している。1928年のこの論文は、シュテッカーの優生思想の発展史のなかでは、ほぼ最終的な理論的到達点のものと見なしうる。そこで、この論文の内容を吟味しておくことは、これからさかのぼって、シュテッカーの活動の初期からの優生学的言説を分析していくために有意義と思われる。

この別刷は、掛川が、ドイツのクルト・ヒラー研究者で古書店主であるマルティン・クラウスナー (Klaussner, Martin) から入手した。クラウスナーから、クルト・ヒラー (Hiller, Kurt 1885-1985) の所蔵であったと聞いている。ヒラーは、ベルリン育ちのユダヤ人で、ゲオルク・ジンメル (Simmel, Georg 1858-1918) のもとで博士号を取得した政治哲学者であり、詩人でもある。「母性保護同盟」の会員であり、シュテッカーの長年にわたる友人で、平和運動においてもシュテッカーに非常に近い位置で活動していた。シュテッカーは、トルストイ (Tolstoi, Lev Nikolaevich 1828-1910) とガンディ (Ghandi, Mahatma 1869-1948) の非暴力思想を土台にして、1919年にはヒラーと一緒に「反兵役同盟」(Bund der Kriegsdienstgegner) を設立した。それは1922年には、社会主義者とアナキストが多く所属する「国際反兵役ドイツ支部」(Deutsche Gruppe der Internationale der Kriegsdienstgegner) へと発展した。ヒラーは、1926年に「革命的平和主義者グループ」(Gruppe Revolutionäre Pazifisten) を創設したが、シュテッカーも設立メンバーのひとりである。1905年からのシュテッカーの伴侶ブルーノ・シュプリンガー (Springer, Bruno 1873-1931) もユダヤ人の弁護士であり、シュテッカーの「母性保護同盟」での活動を大いに助けた。法律婚ではなく、二人の間に子どもはない。シュプリンガーは1931年に死亡した。

1933年のヒットラー（Hitler, Adolf 1889-1945）の政権掌握後に、シュテッカーは、スイスの性改革運動家で平和主義者であるアナキストの医師フリッツ・ブルップバッシャー（Brupbacher, Fritz 1874-1945）のいるチューリッヒに逃れ、1938年の末まで滞在した。チューリッヒでの最初の2年間もシュテッカーは国際平和のための文章を発表し、可能な限り欧州の国々で産児調節に関する講演を行った。「母性保護同盟」は1933年3月にナチ女性によって引き継がれてしまい、それによってシュテッカーの活動の意図は断ち切られた（Wickert 1991: 135）。新たに引き継がれた組織は「ドイツ母性保護同盟ベルリン」として1940年まで存続し、自身かあるいは父親が「精神薄弱」か「遺伝病」である女性と子どもに対し、断種させることを課題にする団体となった。1938年にシュテッカーはナチから逃れるためにさらにロンドンに移住し、そこからストックホルムでのペン会議に参加している時、第二次世界大戦が勃発した。彼女はそのまま北欧にとどまり、1940年4月のドイツ軍のデンマーク占領によって、アメリカ合衆国への亡命を決意した。1941年にモスクワに飛び、ウラジオストックを経て、横浜から船でサン・フランシスコに渡った。さらにニューヨークに移り、1943年2月23日に癌のため死亡した。

他方ヒラーは、逮捕され強制収容所から逃れた後、プラハを経てロンドンに亡命し、戦後ブレーメンに帰還して、長く100歳まで生きた。この5頁に過ぎない薄い別刷は、第二次世界大戦の戦火をくぐり、どのように現代に伝えられたのか。もはや知るすべもないその経緯に思いをはせると、歴史の中に生きる私たち人間の存在と営為のえもいわれぬ意義を考えさせられる。

1 第2回性改革会議におけるシュテッカー

当時58歳であったシュテッカーは、第2回性改革会議に賓客として招待され、2本の報告をした。クリストル・ヴィッケルト（Wickert, Christl）は、現在のところシュテッカーについて最も詳細な伝記『ヘレーネ・シュテッカー 1869-1943：女性運動家、性改革者、平和主義者：伝記』（Wickert 1991）を出版しているが、そのなかで、この会議に関して、次のように記述している。

「1928年7月1日から5日にコペンハーゲンで開催された第2回性改革会議に、『国際母性保護同盟』（Internationale Vereinigung für Mutterschutz）の創設者は賓客として招待され、2本の報告をした。すなわち、まず彼女は、ドイツで宣伝活動した『同志婚』（Kameradschaftsehe）という理想を紹介した。その理想は、2名の若い人間の合法化された結びつき（legalisierte Verbindung）から出発する。かれらは相互の愛情と負担を負う能力の深さを試す時間を持つために、共同生活のはじめの数年は意識的な産児調節を通して子どもを避ける。しかし、そのような結びつきの非官僚的解消の可能性は、特に男性たちに、共同生活を通して生じる責任から速やかに逃れ出る可能性を与える、ということも彼女は示唆した。第2の論文のなかで彼女は、ソビエト連邦への旅行から始めて、『産児調

節と人間経済学』という題のもとに、かの地での出産と人工妊娠中絶診療に関して報告し、できるだけ健康で望まれる子どもを求めるために、世界中にそのような設備を設立することを支持した。優生主義者として、確かに彼女は生殖禁止の合目的性に関して熟考はしたが、それでも成人である個人の自己決定権と啓蒙の可能性を指示して、厳格な命令は拒否した。『母性保護同盟』のブレーメン支部の代表で社会民主党員のアウグステ・キルヒホッフ (Kirchhoff, Auguste 1867-1940) は、『子沢山の家族の困窮』という題のもとで、貧困、病気、劣悪な住環境と中間層所属者のプロレタリアートへの、高い子ども数の結果である『転落』を強調した。彼女は、望まれる、すなわち『健康な』『強い生命力の』子どもたちのみが母親に喜びをもたらすという結論に到達した。優生学者や民族衛生学者、男女からなる30名の会議参加者は、最後に次のような結論に至った。すなわち、子ども数は両親の経済的、心理的、身体的な状況に従うべきであり、『不適格な』パートナーは当然子どもをつくることは断念すべきである。妊娠中絶は世界中で単に医学的かつ社会的適用のみならず、優生学的見地からもまた許可されるべきである、と」(Wickert 1991: 111-112)。

従って、ここに訳出するこの別刷は、性改革会議におけるシュテッカーの第2講演の原稿であることがわかる。

シュテッカーはかつて1904年7月から9月までバルト3国に休暇をかねた講演旅行をしていた。また1908年3月から4月にかけて、オーストリアからバルカン半島まで講演旅行をし、コンスタンチノーブルまで行っている。シュテッカーは、1917年には、「社会主義と平和主義の永続的結合」を掲げ、10月革命に対しては、その暴力性のゆえに両義的態度をとったが、第一次世界大戦後の反ボルシェビキ宣伝は拒否した。1923年にベルリンに「新ロシア友の会」(Gesellschaft der Freund des neuen Rußland) が設立されたときに、アインシュタイン (Einstein, Albert 1879-1955) やパウル・レーベ (Löbe, Paul 1875-1967) らとともにシュテッカーも参加した。1927年に、シュテッカーは、友の会の代表としてソビエト政府から招待され、ソビエト連邦へ旅行しており、その折に革命記念祭の一環である11月7日の夕方のレセプションで、クララ・ツェトキン (Zetkin, Clara 1857-1933) と知り合っている。シュテッカーは、この頃はソビエト連邦における母子のための福祉領域での展開を高く評価していた。後に1941年に亡命の途上でモスクワに立ち寄ったときには、変ってしまった都市の姿に失望を表明している。シュテッカーの判断基準は、人間性の尊厳と幸福の実現に置かれているので、国家自体の擁護はもとより視野になかったであろう。実際には、この別刷に即して見る限り、ヴィッケルトの報じているほどには、ソビエト連邦への旅行のことは書かれていない。用意した原稿以外に口頭で旅行から得た知見を導入として紹介したのかもしれない。

この原稿には、リスクを承知しながらも、科学による人間の幸福の実現を信じ、生殖の合理化の路線を啓蒙しようとする主張が明瞭である。しかしこの生殖の合理化による幸福が、シュテッカーが「同志婚」と呼ぶ、自立するひと組の男女の持続的伴侶関係と組み合わせられていた点は重要である。シュテッカーの若い時代からの「新しい倫理」の理想が経

済的にも人格的にも自立している男女の「同志婚」に集約され、子どもが愛されて生まれ育つ条件を整えるために産児調節が必要である、という信念として主張されている。1928年段階においても、「母性保護同盟」創設時から強調していた、対等な男女の伴侶関係をなおも紹介していることに留意しなければならない。抽象論としては他の新マルサス主義者と区別が困難な、理想社会の実現のための優生学的主張であるが、具体的には幸福で親密な男女関係のために、そしてまた困窮する母親のために、産児調節は不可欠な現実的要求と考えられていたのである。

2 1928年論文における優生思想について

この第2論文の中での内的論理に限定してみると、シュテッカーの意図する優生学的主張とは、まさに産児調節と人間経済学である。産児調節は、避妊方法の解禁と医師による妊娠中絶の解禁の必要性の主張を内容とする。人間経済学はまずは、人口統計に基づき、貧困家庭の出生率をおさえて幼児死亡率を下げるということのために、産児調節を政策として解禁するという内容を意図しているが、さらには、未来の人間に幸福をもたらすために、「血統」に関する知識等を内容とする優生学に基づいて、性と生殖の合理的な計画を導入することにまで言及している。

ここでシュテッカーが、「新マルサス主義」および「民族衛生学」という言葉は用いていないことに注目せねばならない。用語を用いないということは、その用語を用いている人々と自らを区別することを意識している、と解釈できよう。まして、人種的な用語である「民族」(Rasse)でなく、歴史的文化的な概念である「国民」(Volk)を用いており、シュテッカーは、ウェイスが挙げた左翼知識人の優生思想の特色と同じく、「非人種主義的優生学」(ウェイス 1998)の支持者という範疇に入る。1911年の『新世代』第7巻第11号に掲載された「ドレスデンでの第4回新マルサス主義者会議について」(Stöcker 1911, 掛川 2007: 第二部参考資料20-24)という報告においては、シュテッカーは、新マルサス主義的運動と母性保護運動は目標において一致しており、手段においてもほぼ一致している、と主張した。新マルサス主義的運動の目標である人種改良は、母性保護と性改革の目標でもあり、産児調節なしには不可能である、とした。しかし1928年のこの報告では、「新マルサス主義者」と自らを区別する意識があったことになり、これは何を意味しているか慎重に考察しなければならない。

また、マルティナ・ハイン (Hein, Martina) は、当時のドイツの優生思想の四つの潮流として、①社会ダーウィン主義者、②民族衛生学者、③新マルサス主義者、④社会衛生主義者を挙げ、第3の「新マルサス主義者」のグループにシュテッカーを入れている (Hein 1998: 42)。新マルサス主義者の名前としてハインは、他に、ヘルマン・ローレーダー (Rohleder, Hermann 1866-1934)、ユリアン・マルクーゼ (Marcuse, Julian 1862-1943?)、マリー・シュトリット (Stritt, Marie 1855-1928)、ヘンリエッテ・フュルト (Fürth, Henriette

1861-1938)、ヨハネス・ラトガーズ (Rutgers, Johannes)、アウグスト・フォレル (Forel, August 1848-1931) を列挙しており、アンチセミストではない民族衛生学者としては、アルフレート・プレッツ (Ploetz, Alfred 1860-1940)、ヴィルヘルム・シャルマイヤー (Schallmayer, Wilhelm 1857-1919)、ルートヴィヒ・ヴォルトマン (Woltmann, Ludwig 1871-1907) を挙げている。これらの人々とシュテッカーの主張内容の詳細な比較が必要であろう。

産児調節の手段、すなわち「避妊技術の知識の仲介」の勧めに関しては、未婚の女性へも避妊方法の知識を解禁するべき、というシュテッカーの主張が注目に値しよう。そして困窮する貧しい家庭の母親たちに、医師による妊娠中絶の解禁を説いているところも、シュテッカーらしい。未婚の女性と貧困家庭の母親を対象にしているのは、初期からのシュテッカーの主張の特色である。

ガルトンを引用してシュテッカーは優生学を、「将来の世代のための血統の意義の知識」、「幸福に生まれる教え」と表現している。「よりよい人間の未来を建設するため」に、産児調節を「新しい人間学と人間経済学の不可欠の構成要素であり、健康で、生きる喜びに満ちた人類の構築のために不可欠の要因」と断言しており、「人間の状況の改善のための、人間の苦痛と苦悩の軽減のための、人間の幸福の増大のための」「重要で決定的な手段」とも呼ぶ。「血統の意義」と述べているが「遺伝」という用語は用いていない。

困窮する母親の身体的疲弊からの救済のために妊娠と妊娠の間隔をあけることや、結婚という「生涯にわたる幸福が状況によって拒否されている」未婚の女性たちに性的喜びの享受をもたらす手段としての避妊や中絶の方法の伝授の必要性、という主張に照らして見れば、この場合の産児調節の目的は「遺伝」とは明らかに無関係である。産児調節が必要な理由として、第一次世界大戦後のドイツの状況、単純に数的に男性不足で未婚を強いられる女性の増大、住宅事情の劣悪さのための非衛生な多産を挙げていることも、「遺伝」の問題とは全く別の事柄である。経済的に困窮している子沢山の家庭の父親が、「戦傷者、肺病、酒飲み」と述べられている点についても、少なくとも「戦傷者」は明らかに「遺伝」ではない。「無能者」や「弱者」とは誰か、ということが問題であるが、文中の具体的記述においては、経済的窮乏のなかにある非熟練労働者や「戦傷者、肺病、酒飲み」などの家庭しか挙げられていない。よく言われる「精神病者」や「精神薄弱者」は言及されていない。結果と現状としての「無能者」「弱者」ということである。

従って、シュテッカーが産児調節を推奨する理由は、貧しい母親の多産からの保護、未婚を強いられている女性の避妊可能性授与、遺伝病ではなくて「戦傷者」や「肺病」などの後天的理由で現実困窮している家庭の多産防止、が第一義的である。決して、先天的な遺伝病を列挙してはいない。女性の現実の窮状の解決に寄与することを目的にしている。

しかし総論としては、シュテッカーは「血統」に関する学（すなわち現在では遺伝学）を主な内容とする優生学の未来に期待し、その科学的知識が未来において、人間の幸福の増大に貢献すると信じようとした。当時はまだ「血統」についての知識は全く不十分であっ

て、誤用の可能性をシュテッカー自身が想定できているにもかかわらず、有効性を敢えて信じるべきと主張した。シュテッカーの人間愛は、禁欲主義的キリスト教倫理と決別したとき、それにかわって、人間の理想実現に向かう努力を保証する哲学的信念として、科学的新知識に裏付けられた人間の理性的実践に信頼を置こうとし、科学の進歩への期待を宗教的位置に据えようとした。知識を用いるのは、ほかならぬ人間であるのに、なぜそれほど楽観的に人間を信頼したのか、という疑問を私は禁じえない。優生学が人間の悲惨のすべてを解決するかのごとき雑駁な把握がどうして主張できたのか、不可解である。むしろ科学的知識の段階がまだあまりに粗雑であったために、願望が信念に変わったのであろうか。具体的な産児調節の目的とあまりに粗雑な優生学擁護の論理との乖離をどう考えるべきなのか。シュテッカーの目指す人間の完成とは、人格的に有徳で、高尚な人間性を身につけた教養人であることは間違いない。ここでもニーチェ（Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900）に言及しており、理想的人間と「超人」の同一視は続いていたのであろう。個人的に高い人格性を目指し努力すること自体は悪いとは思えない。若いときから抱いていた貧しい労働者への共感（＝隣人愛）と可能な限り高い教養を獲得し至福の世界に到達しようとする欲求（＝ニーチェ主義）との矛盾が根底に存在するようにも思われる。

シュテッカーは、「ひとにぎりの階層」があえて戦争を勃発させ、生命を要求できる限りは、国家は「暴力装置」とであると認識し、国家は人間のための「管理共同体」あるいは「文化共同体」に変わらねばならないと書いている。アナキストの思想に近い。キルヒホッフの報告と比較するならば、シュテッカーには中産階級への肩入れは薄く、中産階級の教養市民層の代弁というより、労働者女性の側に立つものである。カント倫理学を連想させて、「国家サディズムのためには人間はまさにまだ自己目的ではなく、目的のための手段に過ぎない」と述べる。目的としての人格というカント（Kant, Immanuel 1724-1804）の崇高な人間観を受け入れていたシュテッカーは、国家による強制断種を明瞭に主張したことはない。殺人は端的な悪であり、強制も暴力だが、生まないという自主的選択は許容した。人間の生命は本来「神聖であり、不可侵であり、最高善」とであると断言するシュテッカーが、啓蒙を通しての自主的避妊という方法とはいえ、「無能者や弱者」の生殖の否定を要望できたのはなぜか。この論理的構造を慎重に解明せねばならないだろう。

最後に、結論部分で、シュテッカーは、産児調節の手段を持つ権利が生殖しない義務に連なることを示唆している。問題が2点指摘できる。第1に、科学的知識が正確なものになれば生殖禁止の法制化の可能性を譲歩している点である。第2に、個人の義務意識の内面化ということである。自主規制によって生まない選択をする道、つまりその人の責任意識において生まないことが義務意識として内面化される道のことが考えられている。手段行使の権利が与えられたことで、自己決定権を持つがゆえに、人間の価値の内面化（＝序列の内面化）によって「望まれない」子どもを生まない選択をすることが、想定される。これは、私たちの「内なる優生思想」の問題となるだろう。

シュテッカーは、「人間の状況の改善のため」、「人間の苦痛と苦悩の軽減のため」、「人

間の幸福の増大のため」、産児調節が役立つと信じていた。文脈のなかでは、繰り返し、多産による母親の、死に至るまでの身体的疲弊からの解放を、「状況の改善」、「人間の苦痛と苦悩の軽減」の具体的内容として描いている。シュテッカーが常に言及していたこの具体性から離れては、シュテッカーの優生思想は、他の多くの左翼優生主義者と同様の「テクノクラティー」(ウェイス 1998)の主張と同一視されても仕方がない。いずれにせよ、「人間経済学」とは、科学性に基づき、合理性と効率性を用いて人間の生殖を管理する学問として想定されており、この学問の本質的論理は非人間的なものであることを否めないのである。

3 シュテッカーの優生思想に対する批判的研究の動向

シュテッカーの優生思想に関する最新の批判的研究動向のなかでは、日本では、ドイツの医療政策史の研究者である市野川容孝が、ワイマール期のドイツ左翼知識人における「低価値者」(die Minderwertigen)の否定問題としてシュテッカーを厳しく批判している。ドイツでは、1998年のブレーメン大学での学位論文であるマルティナ・ハインの『ヘレーネ・シュテッカーにおける女性解放思想と優生学的思想の結合』(Hein 1998)が、このテーマについては目下のところ最も詳細で包括的な研究である。ハインは、現代の出生前診断に関してフェミニストたちが示した優生思想に疑問を抱き、その批判から出発して、結論としてシュテッカーのナチズムへの「共犯性」を指摘するまでに至っている。

市野川は、「性と生殖をめぐる政治——あるドイツ現代史」(市野川 1996)において、徹底した個人主義に基づくシュテッカーの、性と生殖に関する個人の自己決定権の主張を不十分と指摘した。市野川のシュテッカー批判は、「シュテッカーのラディカルな個人主義も、まさに『自己決定』という概念を転回点としながら『低価値者』という概念に折れ返っていった」(市野川 1996: 199)という主張に集約される。「国家に対抗して女性の自己決定権を主張するヘレーネ・シュテッカーが、その一方で、ほとんど憎悪に近い言葉を『低価値者』に浴びせかけるのも、彼らにはそもそも自己決定能力や法的権利能力が欠けていると考えていたからなのだ。ナチスの優生政策を本気で批判するのなら、自己決定能力を生きるに値する生命の基準と見なす考え方そのものを批判しなければならない」(市野川 1996: 192-193)と述べる。市野川の批判の言葉のなかで、シュテッカーに関して、「ほとんど憎悪に近い言葉を『低価値者』に浴びせる」という表現には疑問があるし、「低価値者」を否定するために「自己決定能力や法的権利能力が欠けている」という理由を直接挙げたシュテッカーの文章というのを、私はまだ見ていない。

ところがさらに市野川は立石真也との対談のなかで、「ヘレーネ・シュテッカーという今世紀初頭のドイツで徹底した個人主義を貫いたラディカル・フェミニストがいます。…そのラディカルな個人主義のゆえに、ヒトラーが政権をとった1933年にいち早く亡命を余儀なくされた、そういう人物です。にもかかわらず、その彼女が1914年に述べたこと、

つまり『低価値者』のために裂かれる無駄な出費を減らすためにも優生政策を実施しなければならないという論理は、ナチスが断種法に始まる一連の優生政策の必要性を国民に訴えるためにおこなった数限りないプロパガンダで繰り返されたものと寸分の違いもないものなんです」(立石 2000:125-126)と極言している。ここで市野川が例示したのは、1914年の『新世代』第10号第3号に載せた、シュテッカーの「国家的分娩強制か民族衛生学か？」(Stöcker 1914, 掛川 2007:第二部参考資料31-37)であるが、それは、シュテッカーが国家による出産強制法案に反対している文中において、ハヴェロック・エリス(Ellis, Havelock 1859-1939)の『民族衛生学と国民の健康』を紹介しながら論を展開している部分であり、そこでの「低価値者」の語もエリスからの借用の可能性が高い。また1910年の「ハーグ国際新マルサス主義者会議」(Stöcker 1910, 掛川 2007:第二部参考資料14)も「低価値者」を否定する発言として言及されるが、それは軍国主義との関連でフォレルの主張を紹介した文章であり、注意が必要である。その文中でフォレルの主張は、「軍国主義は低価値者を在宅させ、そのため彼らは子どもたちを生ませる。そしてそのため健康者が撃ち殺される」と書かれ、「人工的な永続する不妊が、それは、墮落者と不治の病者、アルコール中毒と犯罪者のタイプの場合に無制約に望ましく」と続いているのであるが、ここでの「低価値者」という言葉とその否定の主張はシュテッカー自身のものではない。

これまでに私が翻訳した限りのシュテッカー自身の言葉は、例えば、1910年の「ハーグ国際新マルサス主義者会議」においてシュテッカーが行ったという「母性保護と新マルサス主義」という報告の要約のなかで、「母性保護運動も民族改良の運動であると強調された。なぜならその運動は、困窮に陥った母親と子どもたちを助けようとするだけでなく、その生存が人類にとって何の進歩も意味しない人間は、もしも可能ならばそもそも生まれないということのために他者に配慮しようとするのだから。(中略)遺伝的に欠陥を負っている子どもたちを私たちが全く生まれさせないということが、健康な発達のためのあらゆる指示を性的領域でも私たちが普及させることが、私たちが老フランシス・ガルトンがそれを欲するように、『幸福に生まれること』の教説を未来の宗教にすることが、それに属している」(Stöcker 1910, 掛川 2007:第二部参考資料14-15)と書いている部分に見られるようなものである。市野川の言うような理由の挙げ方はしていない。理由を挙げずに避けることが望ましいと見なしている点にこそ問題があるのではないだろうか。シュテッカーは、「遺伝的に欠陥を負っている子ども」を挙げているが、それは「その生存が人類にとって何の進歩も意味しない人間」という範疇で把握されるもので、詳しい言及はない。しかも先に見たように、1928年の論文では「遺伝」ではなく「血統の意義の知識」としか言及せず、全く抽象的にしか展望を語っていない。しかもこのときのシュテッカーの報告の強調点は、「母性を不利な状況の下では拒絶する権利と義務」を、「母性の引き受けあるいは拒絶を通して」の産児調節の権利を、女性に得させようという主張であり、それはまさに女性の自己決定権の主張であるが、「民族改良」と言う観点は困窮に陥った母子の救済という母性保護運動の裏面として言及されている。当時の男性研究者のあからさまで非

情な言説に比べ、シュテッカーの「人類の高揚」発言は観念的なものとどまっている。

ハインの結論によれば、シュテッカーは「淘汰」と「撲滅」という帰結を伴う「全能信仰と可能性妄想」を助長し、「完全な人間」の内在的ビジョンと「低価値者」のいない社会の可能性のビジョンを、無批判に受け入れたとされる。「欠如した自己批判的対決と洞察」により、シュテッカーは、優生学的思考と行為の設立と流布に「有責の共犯性」を負っているものであり、すでに1933年以前にシュテッカーは、イデオロギー的土台を用意され優生学的に方向付けられた社会モデルの貫徹に参加し、そこにナチは多くの抵抗にあわずに、民族衛生学的プログラムを例のないほど残酷に移植した、とハインは指摘する。勿論、ハインは、シュテッカーの共犯性を軽くする論点を2点挙げている。第1に、シュテッカーはナチの反対者であり、当時の時代的展望のもとではナチのその後の残虐行為は想像不可能であり、予見不可能であった。第2に、シュテッカーの優生学的色彩を帯びた心情は、個人的特殊性でもドイツ的特殊性でもなく、アメリカ合衆国のマーガレット・サンガー (Sanger, Margaret 1883-1966) のように、当時の政治的、社会的、解放論的運動家に共通であった。しかしそのうえで、「このような責任の相対化にもかかわらず、ヘレーネ・シュテッカーが、情け容赦ない評価と除外を前提にした優生学的に整備された社会秩序を求めて努力し、すべての『弱者』の解消を狙い、優生学的理想を命令と宣言し、それで不可避免的に『低価値者』の、特に自己決定権と最終的帰結においては生存権を脅かした、という事実は残る」(Hein 1998: 196)、とハインは厳しく結論付けている。

あくまで産児調節の啓蒙と普及を目的にしていたシュテッカーの、貧困で苦しむ女性労働者たちを救済しようとした「母性保護同盟」での活動を、組織をのりつた後にナチが行った国家としての人間性否定の諸政策と同一視はできない。しかしハインの指摘するような意味での「共犯性」は確かに否めない側面がある。「母性保護同盟」の活動のなかで、シュテッカーは、明瞭に「低価値者」を否定する優生学的提案をしている男女とともに活動し、自身の主張は全く同一ではなかったとしても彼らを否定はせずに、むしろ紹介し引用し続けていた。しかしそれでもなお、時代を先んじたシュテッカーの、肯定すべき重要な活動の意義をすべて覆すような「共犯性」の側面の強調ではなく、活動の全体的関連のなかでのシュテッカー自身の優生思想の詳細な分析自体がなされるべきである、と私は考えている。

おわりに

以上検討したように、シュテッカーの優生思想の問題点を明らかにするためには、関連する諸論文をひとつひとつ丁寧に読み、内的論理の発展過程を詳細に吟味することが必要である。そしてさらに、同時代の優生主義者との比較研究が不可欠である。その後で、私は再び、「低価値者」の生殖否定の問題を検討したいと考えている。人間は心身ともに壊れ物であり、苦悩がなくなることはありえない。繰り返し病み、傷つき、不治の病に至り、

必ず死す人間の共生の道をこそ求めねばならない。何でも自分で決めて実行できる有能な人間のみを基準にすれば、私たちは老いを意識したときにもはや生きられなくなる。良心的にひっそりと生きるにしても、介護者を必要とするという点だけでも、老人は社会にとって「有害な否定的存在」ということになってしまうだろう。しかし不自由であっても出会える生の喜びが、人間を励まし生かすのではないだろうか。有限で多様な人間の生きる意味を、根底から考えさせる問いとして、優生思想の問題はある。安易に結論は出すべきでなく、問いとして考え続けることこそが重要ではないだろうか。

訳 文

性改革会議（Sexual Reform Congress）コペンハーゲン、1928年7月1～5日（別刷）

ヘレーネ・シュテッカー博士、ベルリン

「産児調節と人間経済学」

人口政策という領域で最近ザクセンに2つの請願書が出現した事実は、停滞している資本主義的世界がゆっくりと前進している兆候に思われる。請願書のひとつは、ザクセンの労働省と厚生省の、結婚と性相談所に関する1927年12月20日の請願書であり、もうひとつは、1928年の3月2日のザクセンの州保健所による、産褥熱の増加の原因に関する、特に、医師による妊娠中絶の解禁を通してこの発病の減少が期待されるかどうか、という問題に関する請願書である。社会主義政党の提案に現れたこの請願書が持つ価値ある統計的資料に並んで、専門家の鑑定と、ザクセン州議会においてこれに引き続いて行われた討議も、私たちの問題にとって有意義である。

非常に保守的な婦人科医であるライプチヒのゼルハイム（Sellheim）教授は、産褥熱の問題に関する鑑定人である。ゼルハイム教授は医師たちのなかでさえも並外れて時代遅れである。彼の世界観によれば、彼は政治的に極右派に立つ。すなわち、例えば、彼がロシアにおける諸関係を批判するような、あるいは彼が数年前にヴェルサイユ平和条約に対する抗議集会を妨げたような仕方は、——現代人ならばほとんど不可能と見なさねばならないように、狭量で、臆病で一面的である。しかしゼルハイム教授も大変情熱的に、例えばロシアで母親保護と子ども保護のために、あるいは婚姻形態の新規則や婚外子の取り扱いなどのために起きていることのすべてを忌み嫌う。——それでも彼も最後には、ロシアではあらゆる人工妊娠中絶は病院へ移されていることを、肯定的に認めねばならないし、さらに、現代の経済的悲惨さが過剰な妊娠に対し女性の保護を要求している、と婦人科医として認めざるを得ない。堕胎を禁止したいならば、次のような2つの手段しかないことを彼も承認する。第1に、私たちもそれらを母性保護と性改革のための同盟のなかで以前から要求してきたように、子どもの養育のための国家や地方自治体の援助や親の保証

あるいは子ども年金である。しかしさらにその上、ゼルハイムも承認しているのだが、子どもの養育のためのこの手段は、実際に寛大な形式においては存在していないのだから、私たちは適時な避妊の最も合目的な仕方に関して啓蒙を必要としている。知識人の手中にある避妊方法が彼らの増殖のみを減じている一方で、もしも劣った才能の者（die Minderbegabten）にこの手段を知らせたならば、これに加えて愚鈍の遺伝が堪えられる関係のなかへ持ち込まれることができる、とゼルハイム教授は当然明言している。これによって、敢えて誰もなさない実践的な優生学が営まれうる。その適用の必要が有無を言わず求められているところで、避妊方法を隠蔽しておくことは、従って、単に国民（Volk）を故意に愚鈍なままにしておくのみならず、愚鈍をさらに育成するということである。

必要とあれば左翼の医師や政治家や社会主義的報道機関が、この理念のための闘争において私たちを支援していることに、私たち性改革者は久しく慣れている。しかしこのことは周知のごとく、私たちは理念の先駆者とのみ関わりを持つべきである、という意味である。ある理念は、それ以外は保守的な頭脳と心情もそれほど長くはその理念に対し耳を閉ざしてはいないし、価値を認められて初めていわば凱進行進を始める。そして産児調節のためには、実際に今それが始まるように私には思われる。政治的反動の代表者ですら、もはやそれほど長くは産児調節の必然性に耳を閉ざしてはいられない。事実は実際にも余りにひどい言葉を語る。50歳以下の1000人の既婚者の子ども数が、教師の場合93人に、医師と官吏の場合105人に、熟練労働者の場合153人に、非熟練労働者は257人になる、従ってつまり、教師の約3倍になるとすると、実際に取り返しつかない怠慢が、すなわち、国民の教育のために、性的責任性のために、婚姻と親性（Elternschaft）の領域において召喚されるものの怠慢が、ここにはありはしないかと問わねばならない。高い出生数と幼児死亡率の間に内的な解決できない連関があることは、このテーマに一時でも取り組んだ者なら誰もが知っている。ドイツにおける1911年の、出産計画のための第1回国際会議に引き続いて、ヴィックゼル＝ルント教授（Wicksell-Lund）、ドライスデイル（Drysdale）、ラトガーズ（Rutgers）などによる最高に有意義な数量を、私は『新世代』に公表した。そして、すべての統計が、ハンブルクのカール博士（Karl）の統計、ヴェルツブルクの枢密院のヴィルヘルム・ベーメルト（Böhmert, Wilhelm）の統計、そして最近ではリーゼ博士夫人（Riese）のそれが、同じ結果になったのは興味深い。そうして社会的に地位の高い人の場合20人にひとりの子どものが、労働者の場合5人にひとりの子どものが死んでいる。出産を防止する方法に関する啓蒙を通して人は軽率と浮薄だけを育て上げるだろう、という愚かな異議に対しては、そのような反対者は結婚問題と性的問題において一度でも自分で助言の授与に携わりたいか、と言われるべきである。彼らは子沢山の母親たちと知り合うべきである。少なくとも避妊方法を通して時宜にあってその母親たちに保護を与えられない場合は、彼女たちは出産で消耗し、破壊され、子どもたちと家族から奪われてしまう。しばしば子沢山の父親たちも100%近く戦傷者、肺病、酒飲みなどであり、そして女性たちはこの恐ろしい経済的身体的窮乏のもとで疲れて鈍感になる。先日シュレージェンの労働者新

間に誤った小記事を通して、母性保護同盟宛の妊娠中絶の願いを付けた無数の手紙が来た。このあふれる困窮と不安を見ることは衝撃的だった——そして助けられないことはとても辛かった。そのような苦しめられた人間の生命力に無関心な態度をとること、そして文化と人間性の、あらゆる法に矛盾するこの野蛮で不毛な多産を彼らに背負わせることは、むしろまさに無意味で軽薄ではないだろうか。戦争と戦後の時代がすべての国々で引き起こした悲惨は、あらゆる事物に先立ち、恐ろしい住居難であり、それは多くの伴侶に寝室を自分たちだけのために所有することを一度も許さない、つまり、ベルリンだけでも、一部屋に5、6人の人間が住み、自分用の寝台を持たない者が数十万人もいる——この困窮は、産児調節に対するそのような道徳的異議のすべてを全く明瞭に、それらが現実にもそうであるように見せる、すなわち、最善の場合でも無思慮と不明瞭として、——最悪の場合には嫌悪すべき偽善として、野蛮で近視眼的な国家サディズムとして。国家サディズムのためには人間はまさにまだ自己目的でなく、目的のための手段にすぎない。

ところで例えば、ザクセンの請願書に関する、すでに言及したザクセンの州議会の論争におけるような、次のような洞察の始まりを、確認することはまた非常に喜ばしい。——つまり、衛生学上異論の余地ない避妊方法の知識が、重荷を負わされた国民の母親たちのみならず、未婚の女性たちにも仲介されねばならないという洞察である。彼女たちはたとえ十分に完全な人生の幸福を与えられないとしても、自然な愛の幸福のあらゆる喜びから閉め出されるべきではない。合衆国での、そして部分的にはイギリスでも「バース・コントロール」集団においては、人は、その法律のおかげで、性的なことを非常に恥ずかしがり、時代遅れである。どれほど高い程度において愛情生活や性生活が、一部には経済的理由から、一部には心理的理由からも、婚姻外で起こっているか、という事実の前に人は完全に目を閉じている。それゆえ未婚の人間に対して避妊技術の知識の仲介を不必要と見なしている。そのような鴉鳥政策は、有職女性が社会的労働の大きな部分を遂行するべき時代においては、それでも現実に時代遅れになる。戦争によって大部分の女性にとって、自明にも女性にとって最も喜ばしく幸福にしてくれる、生涯にわたる婚姻を結ぶ可能性が、単純に算術的理由から不可能になったあとでは、産児調節に関する啓蒙を既婚女性に制限することは絶対的に無意味である。しかし勿論、市民の生活をあたかもひとつの事物が、ただの死んだ所有物が、重要であるかのように自由にすることが政府になお可能な限りは、戦争の事実自体がすでに証明するように政府に人間経済学の概念が不足している限りは、結婚と生殖に関する人間経済学についてまだずっと遅れていることを私たちが不思議に思わない限りは、ということである。というのは、親性と生殖に関する従来の諸価値の完全な逆転がなされねばならない、という知識に勝利を得させることに私たちが成功するならば、そのときにのみ私たちも愛と結婚においていっそう健康な状態になるであろう、ということとは実際根本前提であるのだから。

戦争の間でさえいつも所有物、お金、死んだ財産が神聖で不可触と見なされ、国家はあえて有産者や資本家を直接に公開で没収することはしなかったが、個々人の生活はなお国

家にすなわち政府に所属しているように見える、という私たちの人間観がどれほど無意味に倒錯しているか、ということはそれでも特徴的である。ひとにぎりの階層が戦争を勃発させ、生命を要求することを敢えてやれる限りは、なおもあり得る最もひどい奴隷状態が支配している。国家はなお暴力装置である。私たちがはじめてそれを管理共同体に、文化共同体に改造せねばならない。そこにおいては人間の生命は神聖であり、不可触であり、最高善にならねばならない。私たちは全力で、人間は国家のために存在するのではなく、国家が、共同体が人間のためにあるという認識に真剣になるために、働かねばならない。しかし、私たちが文化という手段をも使用しないということなしには、私たちが無能者や弱者（die Untüchtigen und Schwachen）を最も軽く、最も痛みのない道から排除しないようになることなしには、そのような共同体は生じることも発達することもできない。私たちが母親にふたつの出産の間に十分な休みを与えるための配慮をすることなしには、またひょっとしたら全生涯にわたる人間的な幸福が状況を通して拒否されている者たちにも、少なくともこの幸福のわずかな部分を享受する可能性を作るように、私たちが配慮することなしには、そのような共同体は生じることはできないのである。ニーチェは正当にもかつて言っている——彼は多分より高度な人間発達と人間経済学の最初の、まさに最高の預言者のひとりである——「殺してはならない！という律法は、生んではならない！という生命法の重大さと比較して素朴であろう」と。場合によっては厳しい生殖禁令を宣言してもよいところまで、医学はいまだ進歩していないとしても、それでも自分の性的行動のための個々人の責任が強められ、研ぎ澄まされる時代が来ている。産児調節の手段とともに、人間の状況の改善のための、人間の苦痛と苦悩の軽減のための、人間の幸福の増大のための、恐ろしく重要で決定的な手段が私たちの手に入った。この手段もまた誤用されうることが、産児調節への反対者が言うように、誰がそれを否定したいだろうか。しかし、結局、誤用に至ることのないような人間の新知識は、新発見は、新達成というものはない。それはそのような達成の意義を減じうるものではない。この新しい権利を用いて私たちにもあてがわれる新しい義務の知識が、ますます広い範囲に浸透し、ますます真剣さで人間の心を満たす、ということのために配慮することは私たちの義務である、と私は信じる。将来の世代のための血統の意義の知識は、長くたてばそれだけ多く、宗教の意義を獲得せねばならない。幸福に生まれる教えは、優生学の創造者ガルトンが言ったように、未来の宗教にならねばならない。私たちにとって人間がすべての事物の尺度になるならば、私たちがもはや最高善を将来の生活において上から何もせずに期待するのでなくて、私たち自身がよりよい人間の未来を建設すべきである、ということを知るならば、私たちの知識の今日の状況によれば、産児調節の手段は、新しい人間学（Menschenkunde）と人間経済学の本質的構成要素であり、健康で、生きる喜びに満ちた人類（Menschheit）の構築のための不可欠の要因である。

〈参考・引用文献〉

- 市野川容孝 1996「性と生殖をめぐる政治—あるドイツ現代史」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房
- Hein, Martina 1998 *Die Verknüpfung von emanzipatorischem und eugenischem Gedankengut bei Helene Stöcker (1869-1943)*, Universität Bremen (Dissertation).
- Hiller, Kurt 1929 Kamaradin im Kämpfe: Helene Stöcker, in: Hiller, Kurt 1950 *Köpfe und Tröpfe: Profile aus einem Vierteljahrhundert*, Rowohlt Verlag.
- 掛川典子 2007「ヘレーネ・シュテッカーの優生思想」および第2部「参考資料」(シュテッカーの8論文の翻訳)『20世紀初頭における日独米の女性運動指導者に見る優生思想と育児の比較研究』平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- Stöcker, Helene 1910 Der Internationale Neumalthusianer Kongreß in Haag, in: *Die Neue Generation* 6. Jg. H.10. Publikationsorgan des “Bundes für Mutterschutz”.
- Stöcker, Helene 1911 Vom IV. Neumalthusianerkongreß in Dresden, in: *Die Neue Generation* 7. Jg. H.11. Publikationsorgan des “Bundes für Mutterschutz”.
- Stöcker, Helene 1914 Staatlicher Gebörzwang oder Rassenhygiene? in: *Die Neue Generation* 10. Jg. H.3. Publikationsorgan des “Bundes für Mutterschutz”.
- Stöcker, Helene 1928 Geburtenregelung und Menschenökonomie, Sonder-Abdruck Sexual Reform Congress Kopenhagen1.-5.VII1928.
- 立石真也 2000『弱くある自由へ』青土社
- ウェイス・シーラ・フェイト (Weiss, Sheila Faith) 1990 (邦訳 1998)「ドイツにおける『民族衛生学』運動—1904～1945年—」アダムズ・マーク・B編著/佐藤雅彦訳 1998『比較「優生学」史 独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』現代書館
=Weiss, Sheila Faith 1990 in: Adams, Mark B. *The Wellborn Science: Eugenics in Germany, France, Brazil, and Russia*.
- Wickert, Christl 1991 *Helene Stöcker 1869-1943; Frauenrechtlerin, Sexualreformerin, und Pazifistin; eine Biographie*, Verlag J.H.W. Dietz Nachf.

(かけがわ のりこ 大学院生活機構研究科生活文化研究専攻教授)